

2006年度 森村・川村ゼミ議事録

4月26日分

記入者：元島瑞貴

司会者：森村修先生

本日のゼミ報告

1. 合宿について
2. 4年生用ゼミに関する履修アンケート
3. SVA説明会五月開催予定（告知）

決定事項

●合宿について

たつる先生はお仕事の為欠席

合宿に関する変更がある人は27日までに池戸君まで

●学務部からゼミに関する履修アンケート

森村先生から配布、回収。該当するのは四年生のみ

●トシダ先生が五月にゼミに？

SVAの説明会が五月に六本木で開催予定

トシダ先生が近いうちにまたゼミにいらっしゃるかも？

議論の展開

「アートとは何か」は問い続けるべきか 答えるべきか

（司会者）

「アートとは何か」→ひとつの答え、10通りの答えであっても、その答えが果たして重要なのか？<問いの重要性> また、どうして必ず問いに答えなければいけないのか。

（鯨井）

問い続けることに意味がある。アーティストは答えをみんな持っていると思う。

それを受けて私達は考え続けなければいけない。

私達とアーティストであれば、問う＝アーティスト、問われる＝観客なのか？<二面性>

(桑原)

こたえ（ここでは本人が「答え」か「応え」か、指し示すものが不明な為平仮名で記す）が無ければ、芸術の幅が広がらないのではないか。また、こたえはひとつではないと思う。十人十色の中に新しいアイデアがあるかもしれない。＜アートの拡大、拡張＞

(小原)

アーティスト＝日常で「アートとは何か」を考えている
自分達→「アートとは何か」というものに気負い無く反応していく。キャッチボールのボールを取るみたいに。

(鯨井)

「アートとは何か」という問いは一時的なものではない。アートということ自体を考えるのではなく、アートの中身、発信を考える。→答えがないものを問うている？
あるいは、「これってアート？」なのか問うことで、アートというものを客観視するのでは。

(小川)

こたえたくない、こたえられない、こたえないというのも、こたえになっているのではないか？ (No reaction is reaction?) キャッチボールを返してくれなくても、何でもありか。

(司会者)

ボールを使って何かする＝reaction
それがサッカーになっても将棋であってもポストモダンでは許される。「アートとは何か」と問うこと自体をキャラにもできる。そういった意味で、その問いにこたえるという姿勢自体が非常にモダンなこと。答えるということを考えない人々もいるということ、ポストモダンでは言いたかったのかもしれない。

記入者の考察

私達のゼミで常に問われる「アートとは何か」というものが、ポストモダンではその問い自体を放棄できるということを改めて考えさせられました。確かに、ポストモダンでは、その問いを無効化することも可能かもしれませんが。それでも、私たちが「アートとは何か」という問いを、ひとつの学問の中で突き詰めて議論を重ねながら5年間（そして6年目に突入しようとしている）考え続けてきたことは、モダニズム的であっても、決して無駄なことではないと思います。それが「答え」であっても、ただのひとつの「応え」であっても。アートを学問として捉えていくのであれば、ポストモダンのような考え方だけでは進むことは出来ないこと、モダニズム的な考え方だけでもまた行き詰まること、両者の特性を考えた上で、これからも一年間このメンバーでその問いを考え続けたいです。(元島瑞貴)